平成二九年度修士論文要旨

中上健次『岬』論
――反転する家族――

住吉雅子

これまでの中上健次『岬』の研究では血族や血縁といった血のテーマや労働について検討されてきた。本論では『岬』に描かれた「家族」、特に秋幸を取り巻く家族像が近代家族のモデルから逸脱していることを起点に考察した。その際主体の起源がどこにあるのか、出生の謎への欲望を検討している言説を背景に置いた。そのうえで秋幸の「家族」と近代家族の距離感を測るために戦後日本の家族論に沿いながら検討した。そして「家族」のなかの秋幸の位置づけと秋幸の労働や「リズム」との関連を考えることを通して彼らにとっての「家族のようなもの」を考察し、『岬』に描かれた「家族」の位相を明らかにすることを試みた。

第一章「自分の起源への欲望」では秋幸が自身の出生にまつわる「血のしがらみ」から解放されようともがく姿から、出生ということに着目し、自身の起源を知りたいという欲望について、三浦雅士『出生の秘密』(講談社、二〇〇五年八月)を補助線として分析した。ここで秋幸には自身の出生が明かされていることから「空白」が存在しないことがえがかれている点が秋幸の人物造形における重要な起点であることを考察した。そして戦後日本の家族論の変遷を追い、『岬』に描かれる秋幸を取り巻く「家族」との距離を確認した。

第二章「「家族」のなかの秋幸」では亡き兄と秋幸をめぐる描写と秋幸のまなざしによって「家族」のなかに秋幸がどのように位置づけられているのか分析を行った。そうして亡き兄という死の存在が常につきまとう秋幸自身はどのようにして「生」を獲得し続けているのかについても検討を行ったうえで、作中で「家族のようなもの」として「家」が指し示されることを確認した。

第三章「「家」という磁場」では先々夫の法事という「家族的出来事」が義父の「家」で執り行われるという「家」が問題となる場面を秋幸の視点から検討したうえで、彼らが希求する「解消不可能性というファンタジー」によってそれぞれ一対の関係性で結ばれた者同士が「家」という一体性のなかで「家族のようなもの」を成していることを明らかにした。

終章「血の閉鎖性」では『岬』で描かれた秋幸の「家族のようなもの」を結び付けるものが、血縁や婚姻だけでなく、土地に根付いた職業等も含まれることに触れ、親と同じ職業を継承していかざるを得ない閉鎖性がこの土地の血には色濃く、職業にも絡め取られていくことを考察した。

監獄からの物語
――葉山嘉樹「淫売婦」における記述と体験――

長谷川　諒

本論文では、葉山嘉樹「淫売婦」を取り扱い、考察を進めた。従来の「淫売婦」の先行研究では、葉山嘉樹が獄中で執筆したという作家の特性や、「「淫売婦」を書いた日の思ひ出」という手記の記述に着目した論考が多く、作家論の枠組みを越えない研究が多かった。そこで、本論では、作品の冒頭と末尾に附されているエピグラフに注目し、作中に登場する「私」という人物が、一九二三年に獄中で、一九一二年の横浜での出来事を回想し記述する作品と捉えて考察を行った。

このように作品を捉えたとき、作中に登場する「私」という人物は、過去を回想し、もう一人の〈体験する「私」〉という人物を構築していく。つまり、このテクストには、過去を回想し書きつけて行く〈記述する「私」〉と〈体験する「私」〉という「私」の分裂が起こっていることが確認できる。本論第一章では、この「私」の分裂についての考察を行った。過去を回想し〈記述する「私」〉は、〈体験する「私」〉を構築していく。読者はその説明・補足を読むことで、〈記述する「私」〉が語る「此問題、此事件」の虚実を〈体験する「私」〉と共に追及していくことになるのだ。

このような「私」の分裂が起こる中心には何が存在しているのか。エピグラフと作中に何度か登場する「監獄」という言葉に着目すると、一九二三年「千種監獄」に収監されている〈記述する「私」〉の監獄の経験が挙げられるだろう。〈体験する「私」〉の語りの中で、何度か監獄の様子を思わせる表現が見られるが、先述したように〈記述する「私」〉が獄中で回想し書き記しているテクストとして読むときに、一九一二年の〈体験する「私」〉には知り得ない監獄の様子が示されているのである。つまり、ここには、〈記述する「私」〉の監獄の経験が表出しているのである。以上のように、「私」の分裂を生じさせている中心には監獄の経験が潜んでいたのだ。

また、終章では、作中に登場する女に着目した。「淫売婦」というタイトルからは、想像できないグロテスクな状態の女が描かれており、このことについて、同時代評や副田賢二の論を援用することで、〈記述する「私」〉の監獄で醸成された想像力を描き出そうとしていたのだった。これまで確認したように、〈記述する「私」〉の監獄の経験は読者が想像し得ない女を描き出すと共に、〈体験する「私」〉の語りにも監獄の経験は表出していたことが明らかとなった。本論のまとめとして、監獄に収監されている〈記述する「私」〉が、「此問題、此事件」を記述していく目的は、監獄で醸成された想像力を描き出すためであったのだと結論付けた。

吉屋信子「安宅家の人々」における〈家〉と女たち
――映画版を補助線として――

諸 正 菜 摘

本論では吉屋信子「安宅家の人々」が映画やテレビドラマなどによって幅広く受容されたことを踏まえ、作品がどのような可能性をもつテクストであるか考察を行った。

「安宅家の人々」は一つの〈家〉の中に併存する二つの家族の交錯と葛藤が描かれた物語である。本家で安宅家の相続人の宗一は「精神薄弱者」であり、通常の意味での〈家父長〉になり得ない男であった。もう一人の相続人である譲二は妾腹であるためにその権利はもともと与えられていない。この点から考えると、家父長制を基盤とした旧来の〈家〉の制度的な組み替えとは別の次元で〈家〉事態の組み替えが生じているのである。

宗一の妻である国子は家父長制を基盤とする〈家〉の意識に囚われた人物であり、次男の妻である雅子の意識とはズレが生じていた。雅子が移り住んだ頃は意識のズレが見られつつも、互いに子を産み母になることが想定される立場であることから次第に「親近感」を覚え始める。両者には子どもがおらず、〈家〉の存続には欠かせない子の不在が、同じ立場の女として互いに「親近感」を抱かせるのである。小説と映画とでは描かれ方は異なるものの、次第に国子と雅子の連帯は強化されていく。そうした連帯のあり方が、物語の最終場面の男性中心主義的な所有の問題から逃れて初めて可能になる女同士の連帯へとつながっていくのである。

吉屋信子は少女同士の友愛をテーマにした作品を多く生み出し、多数の読者を獲得してきた作家である。「安宅家の人々」はタイトルに明示されたとおり「家族」をめぐる物語であり、吉屋信子の作品であることからも、作品の中に描かれる女性のあり方に読者の期待が寄せられたのはいうまでもない。

物語の中で描かれる〈家〉は女同士の連帯によって作り上げられたものであり、それは戦後まで続いてきた家父長制を基盤とする〈家〉のあり方とは異なるものであった。このような設定を置くことで、戦後の混乱期を背景にして新しい〈家〉のあり方を提示しようとしていたと考えられる。つまり、女たちの新たな連帯によって〈家〉を組み替えていくというモデルを生み出したのである。結末部分で二人は守り続けてきた安宅家の財産を手放し、「小桜学園」の保姆として新たな生活を始めていく。男の私有財産を放棄し、社会に貢献するという形で初めて可能になる女同士の連帯が、新たな女性の一つの可能性として読者に提示されるのである。

『義孝集』の研究
――巻末増補部分に着目して――

吉田尚平

藤原義孝の家集『義孝集』の巻末には、没後の義孝が残された親族等の夢に現れ詠んだとされる和歌が記される。これらの和歌は増補と捉えられ、増補以前の和歌と合わせて研究されることが少なかった。しかし、この巻末の増補は、伝本すべてに見え、これまで増補を含んだ形で『義孝集』は享受されてきている。

本論では、この巻末増補部分に着目し、義孝没後の詠をめぐる他の類話との比較などを通して『義孝集』における父の存在の重さを明らかにし、増補以前の原型部分と合わせて捉えることで、流布していた義孝像を受けて成立したかのごとく『義孝集』を往生譚として読みうることを明らかにした。

第一章では、義孝の死が悲劇的であったこと、また、仏道に専心した人物であり、没後も注目されるなど、義孝の伝承が広く伝わっていたことを確認した。加えて、『義孝集』伝本の関係を押さえることで、増補部分のうち七七―七九番歌の三首を研究の対象に定めた。

第二章では、一首ずつ取り上げ、異本や他伝承との比較を通して、解釈を行った。七七番歌では、第一章で確認した往生を祈願する義孝の姿と響きあうことを押さえる。加えて、表現に注目し、恋歌の要素が強いことを明らかにした。七八番歌では、義孝の死を嘆く親族の姿が見えることを押さえた。七九番歌では、「ちちのおとどおはする所に」が『義孝集』独自の表現であることに焦点を当て、家集における父の姿に注目することで、その存在の重さを明らかにした。また、七九番歌は義孝の往生を示すものであるとし、義孝の往生の願が果たされたことを確認した。

第三章では、巻末増補部分が示す義孝の死を嘆く親族の姿が、原型部分の父伊尹の死を悼む義孝の姿と対照的であることを指摘した。加えて、巻末増補部分の構成が往生祈願から始まり、往生を遂げるといった形で終わることを指摘し、あたかも義孝と伊尹の最期を語るかのごとく存在することを述べた。また、原型部分にある伊尹一周忌の和歌が語の重なりから巻末増補部分と関連することを指摘し、その和歌が義孝死後伝承の成立につながった可能性を指摘した。

以上のように、本論は巻末増補部分を含めた形で『義孝集』を捉えることで、義孝を慕う人物の嘆きや想いに応えたかのごとく伊尹、義孝父子の往生を語るという『義孝集』の新たな読みのあり方を明らかにした。

平成２９年度修士論文要旨

「聞くこと」の研究
――機能的なメモを用いて――

明 尾 香 澄

本論文では、音声言語活動の特に「聞くこと」に焦点をあて、指導・支援の方法について考察した。

第1章では、戦後教育の経験主義、系統主義の流れやアクティブ・ラーニングの流れを増田（1994）の論を参照しながらまとめ、音声言語活動は、常に「学習活動」に附随するかたちで展開されたことを確認した。そこから、音声言語活動そのものを学ぶという視点の必要性を示した。また、日米の中学国語教科書を比較した米田ら（2015）の先行研究から、日本における「聞くこと」の学習が「思考」や「表現」を伴った学習になっていないという問題点を確認した。

第2章では、本研究で対象とする聞く力を「必ずしも問題解決を目的としない批判的・探索的話し合いに必要となる基礎的な聞く力」とし、先行研究を参考に、傾聴過程を①受信②整理考察③発信の準備④発信に便宜上分類した。その上で、先行研究や先行調査をもとに、聞くことの課題が②整理考察以後の過程にあることを明らかにした。加えて、間瀬ら（2011）や山元（2016）の発達調査から、思考を伴った聞くことの指導支援は小学校高学年において行う必要があると結論付けた。

第3章では、思考を伴った聞くことの指導のために「メモ」を用いることを提案し、その有効性を考察した。また、先行研究と実践から、児童の内的な思考活動がブラックボックス化していることを示し、児童の聞く活動を把握するために、まず内容を聞き取る活動を行い、その後整理考察を行うといった、〈受信〉〈整理考察〉の二つの指導の段階を用意する必要があると考察した。その上で、本論文におけるメモの提案は個人の活動を重視し、教員が児童の聞く力を捉える上で有効になると同時に、児童自身が自らの活動を振り返ることを目的とすることを確認した。

第4章では、実際に行ったメモ活動の実践について考察した。その結果として、聞くことの指導方法を考える上で、二段階の場面を設定したメモ活動は、児童の聞く活動がどのように行われているのかの一端を明らかにすることができると結論付けた。

第5章では、二段階の場面を設定したメモ活動を指導面のみならず、児童が学習面で活用できるのではないかと考え、実践した結果を報告した。結果から、児童が情報の整理考察の段階を明確には自覚していないことが顕在化した。本論では具体的な検討にまでは至らなかったが、情報の整理考察に着目させるためには、児童がそれを明確に意識するための手立てが必要であることが明らかになった。

おわりにでは、本論の成果と課題を述べ、まとめている。